

清代八股文における破題・承題の作成法について (9)

滝野 邦雄

承前 (xi) 『搭題文模了然』

[兩截有公共字面題暗破式]

解説なし

[用例]

題目：不遠遊，遊（『論語』里仁：子曰，父母在，**不遠遊**，**遊**必有方）

不忍別父母者，偶別似亦無妨也／夫遊何以不遠，爲其父母在耳〔割注：上を抱く〕，然亦何必永絶夫遊乎（父母に別れるに忍びざる者，偶たま別るるも亦た妨げ無しに似たるなり／夫れ遊は何を以て遠くせざらんや，其の父母の在りと爲すのみ，然らば亦た何ぞ必ず永しえに夫の遊を絶たんや）

〔破題下句：〕頓し得て住む。

〔承題末句：〕恰に下載の「遊」字に到る（『搭題文模了然』卷一・八葉～九葉・「兩截有公共字面題暗破式」条）。

題目：是以若彼濯濯也 二句（『孟子』告子上）

木有所以改觀者，及其久而視爲固然矣／夫濯濯^①若彼，非無故也，見之者第知其濯濯已耳^②（木觀るを改むる所以の者有り，其の久しきに及びて固然と爲るを視る／夫れ濯濯なること彼の若き，故無きに非ざるなり，之を見る者 第だ其の濯濯なるを知るのみ）

①濯濯：題目の朱注に「濯濯，光潔之貌（濯濯は，光潔（つるつる）の貌なり）」。

②已耳：文 畢りて順落の辭なり（『舉業辨字』歇語辭第七・三十四葉・「已耳」条）。

〔破題上句：〕「是以」の二字は眞なり。

〔破題下句：〕確として是れ下載の神理なり。

〔承題末句：〕下意の呼吸 俱に通ず（『搭題文模了然』卷一・九葉・「兩截有公共字面題暗破式」条）。

[長割截題暗破式]

解説なし

[用例]

題目：地利不如人和 山谿之險（『孟子』公孫丑下）

心勝勝於形勝，形勝者宜圖所據矣／夫人和心勝也，彼有山谿之險者，可獨恃其地利乎哉（心勝は形勝に勝る，形勝なる者は宜しく據る所を圖るべし／夫れ人和して心勝つなり，彼の「山谿の險」有る者は，獨り其の地の利に恃む可けんや）

〔破題下句：〕「不」・「以」の二字の全神 都て現わる。

〔承題末句：〕上截の字を用いて下截を詮（闡明）にし，上截の一边 寂莫ならず（『搭題文模了然』卷一・九葉・「長割截題暗破式」条）。

[無情割截題暗破式]

解説なし

[用例]

題目：山節至令尹子文（『論語』公冶長）

于大典以用媚，魯卿有愧楚卿矣／夫山節藻稅，大典也，文仲乃以媚蔡，子張所以問令尹子文乎（大典に于いて以て媚を用う，魯卿（臧文仲）楚卿（令尹子文）に愧じる有り／夫れ「節に山し，稅に藻す」は大典なり，〔臧〕文仲は乃ち以て蔡に媚ぶ，子張が尹子文を問う所以なるか）

〔破題上句：〕語意 嚴重なり。

〔破題下句：〕老氣 横秋す（『搭題文模了然』卷一・九葉・「無情割截題暗破式」条）。

題目：辭達而 冕見（『論語』衛靈公）

辭以傳心明于心者，或盲於目矣／夫宜諸口爲辭，要以達其心之意而已，彼請見之師冕，亦未嘗盲於心也，其如無目何（辭は以て心を傳う，心に明なる者は或いは目に盲なり／夫れ諸を口に宣べるを辭と爲す，以て其の心の意を達するを要すのみ，彼の見ゆるを請うの〔盲人の〕師冕は，亦た未だ嘗て心に盲ならざるなり，其れ目無きを如何せん）

①達其心之意：題目の朱注に「辭取達意而止，不以富麗爲工（辭は意に達するを取りて止む，富麗を以て工と爲さず）」。

〔破題下句：〕自然なり（『搭題文模了然』卷一・九葉・「無情割截題暗破式」条）。

[全偏題暗破式]

解説なし

[用例]

題目：雖欲勿用山（『論語』雍也：子謂仲弓曰，犁牛之子，騂且角，**雖欲勿用**，山川其舍諸）

人心難憑，仰止者固有神矣／夫勿用騂角，人之欲或然，未必神之欲亦然也，盍先微之於山乎（人心 ^{たの}憑み難し，仰止する者は固より神有り／夫れ騂角を用いる勿れとは，人の或いは然らんと欲す，未だ必ずしも神の亦た然らんと欲せざるなり，^{なん}盍ぞ先ず之を山に^{うかが}微わざるや）

〔破題下句：〕何等〔うまく〕斬捷（増添しておよぼす）せん。暗破 亦た確切なり。

〔承題首句：〕務めて上文を倒我（找：補足）するを要す。

〔承題末句：〕川の有る有ればなり（『搭題文模了然』卷一・九葉～十葉・「全偏題暗破式」条）。

[偏全題暗破式]

解説なし

[用例]

題目：執禮皆雅言也（『論語』述而：子所雅言，詩書**執禮**，**皆雅言也**）

有與詩書並論者，聖教固無偏廢也／夫禮之必執^①，較詩書尤重矣，觀所雅言，聖教不已皆備乎（詩書と並びに論ずる者有り，聖教 固より偏廢する無きなり／夫れ禮の必ず執^{まも}るは，詩書に較べて尤も重し，雅言する所を觀るに，聖教 已に皆な備わらざらんや）

①執：題目の朱注に「執，守也（執は，守なり）」。

〔破題上句：〕一の「有」字，一の「並」字あり。便ち此の「執礼」有り。上を補するに在りて何等ぞ灵捷（機敏）ならん（『搭題文模了然』卷一・十葉・「偏全題暗破式」条）。

[對破法]

題意 既に相い^{あまね}洽くし，貌 猶お相い比するがごとくす。粘合（くつつける）の情有り，又た粘合の迹有るは，最も整飭（ととのう）の觀る可しと爲す。然れども破題に對破を用い，承ける處に串筆を用い^{まさ}れば方に妨げあり（『搭題文模了然』卷一・十葉・「對破法」条）。

題目の題意をあまねくゆきわたらせ，文の形が並んでいるようにする。くつつける気分が見えたり，くつつけた痕跡が見えるのが，最も對破法の形式の整っているものとする。しかし，破題に對破を用い，承題に串筆（全体を貫く筆致）を用いたのならば，弊害が生じる。

[割截題暗破式]

解説なし

[用例]

題目：可以無大過矣 執禮（『論語』述而）

子曰，加我數年，五十以學易，**可以無大過矣。**

子所雅言，詩書**執禮**，皆雅言也。

寡過必本於易，垂教尤重／夫禮焉〔割注：制題有法〕，蓋子之無過，即所謂動容周旋^①重禮也〔割注：串合有致〕，而必自學易得之，彼未及乎聖者，可不由詩書而進執夫禮乎（過ち寡きは必ず『易』に本づく，教を垂れること尤も重し／夫れ禮なる，蓋し子の過つ無し，即ち所謂ゆる動容周旋 禮を重んずるなり，而して必ず『易』を學ぶより之を得，彼の未だ聖に及ばざる者は，詩書に由りて夫の禮を進執せざる可けんや）（『搭題文模了然』卷一・十葉・「割截題暗破式」条）。

①動容周旋：『孟子』盡心下に「動容周旋中禮者，盛德之至也（動容周旋 禮に^{あた}中る者は，盛德の至りなり）」。

題目：管氏而知禮 太師樂曰（『論語』八佾）

齊大夫不知禮，魯伶官可語樂焉／夫惟知禮乃可言樂，仲既不知禮矣，尙何有於樂哉，子故以樂語魯太師乎（齊の大夫 禮を知らず，魯の伶官 樂を語ぐ可し／夫れ惟だ禮を知れば乃ち樂を言う可し，〔管〕仲 既に禮を知らず，尙お何ぞ樂有らんや，子 故に樂を以て魯の太師に語ぐか）

〔破題下句：〕語意抑揚し，聯絡生態あり（『搭題文模了然』卷一・十葉・「割截題暗破式」条）。

題目：叟不遠千里 對曰王（『孟子』梁惠王上）

重大賢者隆其稱，悟梁王者尊其號^①也／夫稱孟子曰叟，而竟以利望叟，此王之失其爲王也，孟子欲悟之，故先以王稱之（大賢を重んずる者は其の稱を隆くし，梁王に悟らしめんとする者は其の號を尊ぶなり／夫れ孟子を稱して「叟」と曰う，而して竟に「利」を以て「叟」に望む，此れ王の其の王爲るを失うなり，孟子 之を悟らしめんと欲す，故に先ず「王」を以て之を稱す）

①悟梁王者尊其號：題目の截去された「孟子見梁惠王」の朱注に「梁惠王，魏侯罃也。都大梁。僭稱王。諡曰惠（梁惠王は，魏侯罃なり。大梁に都す。王を僭稱す。諡して恵と曰う）・・・」。

〔破題下句：〕字字眞切なり。

〔承題末句：〕下意を側相す。題界を劃清するの前に于いて，此の定法あり（『搭題文模了然』卷一・十葉～十一葉・「割截題暗破式」条）。

題目：公曰諾，樂正子入見曰（『孟子』梁惠王下）

信纔者不足有爲，薦賢者不得不入矣／夫公之諾，公之不足于有爲也，彼樂正子者，安能不入而有言乎（信の纔^{わず}かなる者は爲すこと有るに足らず，賢者を薦むるは〔魯平公の側に〕入ら

ざるを得ず／夫れ公の「諾」とするは、公の爲すこと有るに足らざればなり、彼の〔孟子の門人で魯に仕えていた〕樂正子なる者、安くんぞ能く〔魯平公の側に〕入らずして言うこと有らんや)

〔破題上句：〕是れ「諾」字の眞際（真義）なり。

〔承題末句：〕「曰」字 亦た到る（『搭題文模了然』卷一・十一葉・「割截題暗破式」条）。

題目：不問馬 君賜脰（『論語』郷黨）

有不問而問獨重、有重賜而賜彌榮矣／夫問不及馬、馬固不重於人也、賜更有脰、脰不倍榮於食乎（問わざる有りて獨り重きを問う、重きを賜うこと有りて賜 彌々^①榮なり／夫れ問いて馬に及ばずは、馬 固より人より重からざればなり、賜うに更に脰（生肉）有り、脰は食に倍せざんか）

〔破題上句：〕上を抱きて跡無し（『搭題文模了然』卷一・十一葉・「割截題暗破式」条）。

①榮：題目の朱注に「・・・脰、生肉。熟而薦之祖考、榮君賜也（脰は、生肉なり。熟して之を祖考に薦む。君の賜を榮とすればなり）・・・」。

〔兩截有公共字面題對破式〕

解説なし

〔用例〕

題目：人之視己 至 十目所視（『大學』傳六章第二節～第三節）

衆著之視無可逃、獨知之視更相逼焉／夫以人視己、而肺肝^①見、以己視己、而十目集、誠則必形、有如此乎（衆著（皆が周知している）の視は逃る可きは無し、獨知の視は更に相い逼れり／夫れ人の己を視るを以て、肺肝 見らる、己を以て己を視る、而して十目 集まり、誠は則ち必ず^{あら}形わる、此の如きもの有るや）

①榮：題目に「・・・人之視己、如見其肺肝（人の己を視ること、其の肺肝を見るが如し）・・・」。

〔破題下句：〕上下の截する處を分貼し、特に切當なり（『搭題文模了然』卷一・十一葉・「兩截有公共字面題對破式」条）。

題目：久要不忘 時然後言（『論語』憲問）

言不忘而人以成、言因時而品益上矣／夫久要^①不忘、此成人之踐言、而未必其能時言也、時然後言、賈乃遽以稱文子乎（言うに忘れずして人以て成り、言うに時に因りて品〔格〕は益々上なり／夫れ「久要」の忘れざるは、此れ成人 言を踐むなり、而して未だ必ずしも其の能く時にして言わざるなり、「時にして然る後に言う」とは、〔公明〕賈 乃ち遽に以て〔公叔〕

文子を稱せんか)

①久要：題目の朱注に「久要，舊約也（久要は，舊約（むかしの約束）なり）」。

〔承題：〕語旨 影射（ほのめか）す（『搭題文模了然』卷一・十一葉・「兩截有公共字面題對破式」条）。

〔長割截題對破式〕

兩句もて撮り兩頭もて施くの長割截題は，尤も出色なるを覺ゆ。然れども明破すれば須く配合もて勻停（適量）にすべし，暗破なれば須く題を制して法を得べし（『搭題文模了然』卷一・十一葉～十二葉・「長割截題對破式」条）。

題目の意味を破題の兩句に統一的に反映させ，破題の兩句の頭の部分にそれをつらねた長割截題はもっとも出色なものであると考えられる。しかしながら，明破にしたならば，配合を適量にすべきである。暗破にしたならば題目をコントロールして適切な方法をもちいるべきである。

〔用例〕

題目：子在川上曰 至 譬如爲山（『論語』子罕）

於川悟道，即山可喻學焉／夫在川上而悟逝者，子蓋偶得於心，而所好不泥乎此也，曰者發好^①德之歎，復有爲山之譬，亦以勵學云爾（川に於いて道を悟る，山に即きて學に喩う可し／夫れ川上に在りて「逝者」を悟る，子 蓋し偶たま心に得，而して好む所は此れに泥らざるなり，「曰」とは「好德（德を好む）」の歎を發す，復た山の譬を爲す有り，亦た以て學ぶを勵ます云爾）

①好德：題目に「子在川上曰……。子曰，吾未見好德如好色者也（子曰く，吾 未だ德を好むこと色を好むが如き者を見ず）。子曰，譬如爲山（子曰く，譬えば山を爲るが如し）」。

〔破題下句：〕落落大方（おおらかで落ちつきがある）たり。

（『搭題文模了然』卷一・十二葉・「長割截題對破式」条）。

題目：大哉堯之 孔子（『論語』泰伯／『孟子』滕文公上）

聖帝之大爲獨至，聖人之大不易知焉／蓋一言堯，則統乎舜禹文武之爲君，莫能外乎其大矣，一言孔子，則統乎堯舜禹文武之道，而獨成乎其大矣（聖帝の大なるは獨り至ると爲し，聖人の大なるは知るに易からず／蓋し一たび堯を言えば，則ち舜・禹・文・武の君爲るを統べ，能く其の大なるを外にする莫し，一たび孔子を言えば，則ち堯・舜・禹・文・武の道を統ぶ，而して「堯もしくは孔子だけ」獨り其の大なるを成すか）（『搭題文模了然』卷一・十二葉・「長割截題對破式」条）。

[無情割截題對破式]

題義 牽合（無理に寄せ合わせる）し易からざれば、必ずしも生湊（無理をして寄せ合わせる）せず。両両（二つずつ）對舉し、字面を用いて串合すれば即ち大方（大体）を要む可し（『搭題文模了然』卷一・十二葉・「無情割截題對破式」条）。

題義が無理に寄せ合わせにくければ、必ずしも無理をして寄せ合わさなくてもよい。二つずつ対応させて、字面を貫けば、大体を求め得たことになる。

[用例]

題目：季騶。子張曰（『論語』微子・子張）

以德稱者名可稽，以言見者言足紀矣／夫騶固以德稱者，彼並立德以立言者，不有聖聞^{ママ}之守（子）張乎（徳を以て稱さるる者の名は稽む可し，言を以て見^{あら}わるる者の言は紀^{しる}すに足る／夫れ〔季〕騶は固より徳を以て稱さるる者なり，彼（季騶）並びに徳を立て以て言を立つる者なれば，聖（孔子）の之^{ママ}を守（子）張に聞くこと有りや）

[破題下句:] 「曰」字に到りて止まる。

[承題二句:] 串合す（『搭題文模了然』卷一・十二葉・「無情割截題對破式」条）。

題目：前題（季騶。子張曰：『論語』微子・子張）

殿諸兄^①者才更奇，開衆論^②者言足誌矣／蓋有季騶以殿諸兄，而才更奇也，有子張以開衆論，其言不可特誌乎（諸兄^{しんがり}に殿する者は才 更に奇なり，衆論を開く者は言^{しる} 誌すに足れり／蓋し季騶の以て諸兄^{しんがり}に殿する有るは，才 更に奇なればなり，子張 以て衆論を開く（子張篇の最初にその発言が置かれること）有り，其の言 特^{しる}に誌す可からざらんや）

①殿諸兄：題目の「季騶」の載去された箇所は「周有八士，伯達・伯适・仲突・仲忽・叔夜・叔夏・季隨・季騶」とあり，「季騶」は「八士」の最後に置かれる。

②開衆論：題目の「子張曰」は，子張篇の最初にある。そこから「衆論を開く」とする。

[破題下句:] 用「殿」字・「開」字を用いて，是れ一是れ二なるを説き得たり。

[承題二句:] なし（『搭題文模了然』卷一・十二葉・「無情割截題對破式」条）。

題目：而後和之 吾猶人也（『論語』述而）

歌有不遽和者，文亦與人同焉／夫和人之歌亦猶夫人也，外著之文，子亦奚必與人異乎（歌うに遽かに和せざる者有り，文も亦た人と同じ／夫れ人の歌に和するは，歌も亦た猶^かお夫の人のごときなり，外 之を文に著わす，子も亦た奚ぞ必ず人と異ならんや）

[破題下句:] 詞意 二つ〔の題目の意味〕を板滯せず。

對破・串承・結合（連結） 致す有り（趣きがある）（『搭題文模了然』卷一・十二葉～十三葉・「無情割截題對破式」条）。

〔串破法〕

或いは重き一截を扼え、或いは定まりし一字を拈り、或いは上截に下截の事有り、或いは下截に上截の事有れば、語意 兩件を貫串（融合貫通）し、直ちに一片を説き成す、而して題位は自から秩然たり。上截を破き下截の題字を拈る・下截を破き上截の題字を拈る。故に聯絡に情有るを覺得すれば、最も學歩（初学者）に宜し（『搭題文模了然』卷一・十三葉・「串破法」条）。

重く踏まえるべき截去された箇所や、つまみ出して定めなければならない一字や、截去された上の部分に截去された下の部分の事があったり、截去された下の部分に截去された上の部分の事があれば、意味はそれを貫通して、ひとつに説明する、そうなれば、題位はおのずと整然とする。截去された題目の上の部分^とを破いて下の部分の題字を取り出したり、截去された題目の下^との部分^とを破いて上の部分の題字を取り出すようにする解法なのである。そのため、つながりに筋が通っているのを理解して書くのは、初学者にはよい解法となる。

〔割截題串破法〕

解説なし

〔用例〕

題目：冉有曰夫子爲衛君 叔齊（『論語』述而）

欲明争國之非、第舉讓國者以爲例焉／夫衛君父子争國、夷齊兄弟讓國似難並論矣、乃冉有方以衛君爲疑、子貢能勿以夷齊爲問乎（國を争うの非を明らかにせんと欲し、第だ國を讓る者を舉げて以て例と爲す／夫れ衛の君の父子 國を争う、〔伯〕夷・〔叔〕齊兄弟の國を讓るは並び論じ難きに似たり、乃ち冉有 方に衛君を以て疑（孔子への質問）と爲し、子貢 能く〔伯〕夷・〔叔〕齊を以て問（孔子への質問）と爲す勿きか）

〔破題：〕但だ字面の相い関するのみならず、題旨も亦た揭然たり（『搭題文模了然』卷一・十三葉・「割截題串破法」条）。

題目：水由地中行、江・淮・河・漢（『孟子』滕文公下）

地中有水、水各以地而分矣／夫水與地不辨、即水與水不分、藉非地中、孰能別爲江淮、別爲河漢哉（地中（水路）水有り、水 各々地を以て分たる／夫れ水と地と辨ぜざれば、即ち水と水とは分たず、藉^かりるに地中（水路）に非ざれば、孰れか能く別ちて江・淮と爲し、別ちて河・漢と爲さんや）

〔破題：〕「分」字は恰^{まさ}に四水（江・淮・河・漢）を厯敦（それぞれに重んずる）する口吻に合す。

〔承題：〕四字 整出する可からず(『搭題文模了然』卷一・十三葉・「割截題串破法」条)。

題目：孔子行。齊人(『論語』微子)

○齊景公待孔子曰、若季氏、則吾不能。以季・孟之閒待之。曰、吾老矣。不能用。孔子行。

○齊人歸女樂。季桓子受之、三日不朝。孔子行)

聖人去齊而相魯、齊人之所忌也／夫孔子苟用于齊、何得去齊、在齊而齊人阻之、相魯而齊人又忌之乎(聖人 齊を去りて魯に〔宰〕相たり、齊人の忌る所なり／夫れ孔子 苟し齊に用いられれば、何ぞ齊を去るを得ん、齊に在りて齊人 之を阻み、魯に〔宰〕相たりて齊人又た之を忌んか)

〔破題：〕開朗にして割截の痕迹無し。

〔承題：〕口氣 虚活なり(『搭題文模了然』卷一・十三葉・「割截題串破法」条)。

題目：心以爲有鴻 孟子曰魚(『孟子』告子上)

有飛鳥之象焉、行且化而爲魚矣／夫鴻鵠何有、心之有耳〔割注：直捷なり〕、易一説、又何妨起例於魚乎(飛鳥の象有り、行き且つ化して魚と爲る／夫れ鴻鵠は何か有らん(差支えない)、心の有る(心を専らにして志を致す)のみ、一たび説くを易えるに、又た何ぞ例を魚に起こすに妨げあらんか)

〔破題：〕老辣の筆なり(『搭題文模了然』卷一・十四葉・「割截題串破法」条)。

〔割截題抱上文串破式〕

上文を抱く處をは即ち是れ下截の處を申く。語意は須く爽便(はつきり)なるべし(『搭題文模了然』卷一・十四葉・「割截題抱上文串破式」条)。

上文の内容を取り込んでいるところは、截去された下文のところを貫いて通じさせる。また、語の意味は、はっきりとさせるべきである。

〔用例〕

題目：有言責者 我無官守(『孟子』公孫丑下)

去有等於失職者、非所論於本〔割注：「本」字は妙なり〕無職者也／夫責既在言、言即其官守也、齊人之譏孟子者、將謂孟子有官守哉(去るは職を失う者に等しき有り、本より職無き者を論ずる所に非ざるなり／夫れ責は既に言(言責)に在り、言(言責)は即ち其の官守(職務にある者)なり、齊人の孟子を譏る者は、將に孟子に官守有りと謂うや)

〔破題上句：〕一の「等」字を著して便ち能く上截の本界を清くす。

〔破題下句：〕「失職」を以て上文を抱き、「無職」を以て下截を破く。下意は即ち詞氣抑揚の間に在り。

〔承題二句：〕上を抱きて有情（意味がつながる）なり。此れ上文を鎔かし、本題に入るの法なり。

〔承題末句：〕平直なる語を作さず。

上文を緊抱するに、即ち字面を用う。串合は極めて灵便（便利）と爲す（『搭題文模了然』卷一・十四葉・「割截題抱上文串破式」条）。

題目：其斯以爲 予知（『中庸』第六章～第七章）

古聖不自以爲知、而今人異矣／夫舜之爲舜、惟不自以爲知、故其知大耳、今人乎、何自以爲知者之多乎（古聖 自から以て知ありと爲さず、而して今人 異なれり／夫れ舜の舜爲る、惟だ自から以て知ありと爲さず、故に其の知 大なるのみ、今人なるや、何ぞ自から以て知と爲す者の多きや）

〔破題：〕上句より跌出すれば絶えて力を費やさず（『搭題文模了然』卷一・十四葉・「割截題抱上文串破式」条）。

題目：潤屋、徳（『大學』傳第六章第四節）

屋之潤也由於富、而富於徳者可思矣／夫屋何以潤、潤於富也、而富於財、何如富於徳乎（屋の潤すや富に由る、而らば徳に富む者思ふ可し／夫れ屋は何を以て潤うや、富に潤うなり、而して財に富むは、徳に富むと何如れぞ）

〔破題：〕「富」字を用いて、下截に申入す（『搭題文模了然』卷一・十四葉・「割截題抱上文串破式」条）。

題目：習相遠也 唯上知（『論語』陽貨）

遠非由於性也〔割注：上を抱く〕、性之者不可多得矣／甚乎習之可懼也、彼不懼所習者、將自以爲上知乎哉（遠きは性に由るに非ざるなり、之を性とする者の多く得る可からざるなり／甚しきや習の懼る可き、彼の習う所を懼れざる者、將に自ら以て上知と爲すか）

〔破題：〕切緊に「性」字を拈す。恰に是れ「上知」なり。「唯」字の精神も亦た出ず。

〔承題末句：〕神理 一併なり（『搭題文模了然』卷一・十四葉～十五葉・「割截題抱上文串破式」条）。

〔割截題照下文串破法〕

解説なし

[用例]

題目：發乘矢 西子（『孟子』離婁下）

發矢者以善全其美，而擅美者宜思所以自全矣／發去金之矢^①，所以曲全其美也，有美而不自全西子何嘗不千古哉（矢を發する者は以て善く其の美を全うす，而して美を擅にする者は宜しく自から全うする所以を思うべし／金^{かね}を去る（やじりをはずす）の矢を發するは，曲さに其の美を全うする所以なり，美有りて自から全うせざれば，西子も何ぞ嘗^{つね}に千古ならざらんや）

①發去金之矢：題目の截去された上文と題目に「[侵略してきた弓の師匠である鄭の子濯孺子を衛の庾公之斯が追撃した時，師匠への恩と国に対する忠との板挟みになり] 抽矢扣輪，去其金，發乘矢而後反（矢を抽き輪^たに扣き，其の金を去り，乘矢を發して而る後に反^さる）」とある。

[破題上句：] 用「美」字を用いて兩截に聯す。

[破題下句：] 下文を撃つ（『搭題文模了然』卷一・十五葉・「割截題照下文串破法」条）。

[兩截有公共字面題串破法]

解説なし

[用例]

題目：曾皙冉有 曾皙後（『論語』先進）

有序於勇士後者〔割注：竅隙を尋出す〕，即其出亦不妨後焉／夫侍坐則後子路，言志則後三子，曾皙無往而不可以後也，況其出乎（勇士の後に序^のべる者有り，即ち其の出だすも亦た後を妨げず／夫れ侍坐するに則ち子路の後なり，志を言うに則ち三子に後る，曾皙往きて以て後る可からざるは無きなり，況んや其の出づるをや）（『搭題文模了然』卷一・十五葉・「兩截有公共字面題串破法」条）。

[長割截題串破法]

長題是一片（全体）を串成すれば，方^{まさ}に精采^{あら}を見わす（『搭題文模了然』卷一・十五葉・「長割截題串破法」条）。

長題は全体を貫いて作成すれば，精彩を示す。

[用例]

題目：振河海而不洩 一勺之多（『中庸』第二十六章第九節）

等河海於一勺，則一勺不足盡水矣／夫河海大矣，而以地振之，猶一勺也，繼山而言水，可以一勺盡之哉（河海を一勺に等しくすれば，則ち一勺も水を盡くすに足らず／夫れ河海は大な

り、而して地を以て之を振^{おさ}（収容する）むること、猶お一勺のごときなり、山に継ぎて水を言う、一勺を以て之を盡す可けんや）

〔破題上句：〕刻摯（真摯で懇切）の筆なり。

〔破題下句：〕一破 已に是れ奪標（及第する）の技なり。

〔承題末句：〕語 半ば神なり。全く是れ一筆を以て兩筆の用を作る者なり（『搭題文模了然』 卷一・十五葉・「長割截題串破法」条）。

題目：然後知松柏 [唐棣] 之華（『論語』 子罕）

松柏不以華見，宜人之知有唐棣也〔割注：清高なるを顧視す〕／夫調^{ママ}（彫）後知亦後，推其不以華見也〔割注：下截を串入す〕，華如唐棣吾且觀其後〔割注：妙筆なり〕（松柏 華を以て見ざるは，人の唐棣有るを知るに宜しきなり／夫れ調^{ママ}（彫）みし後に亦た後^{おく}るを知る，其の華を以て見ざるを推せばなり，華の唐棣の如きは，吾 且に其の後るるを觀んとす）（『搭題文模了然』 卷一・十五葉～十六葉・「長割截題串破法」条）。

〔無情割截題串破法〕

字面^{つまみ}を拈り串合し，便ち無情なる者をして有情と爲すを見わす（『搭題文模了然』 卷一・十六葉・「無情割截題串破法」条）。

〔そもそも無情題は勝手に文章をぶつ切りにして出題するものなのであるが，その〕字面をつまみ出して意味を貫き合わせ，意味が通らない題目を意味が通るようにして示す解法である。

〔用例〕

題目：季騶。子張曰（『論語』 微子・子張）

殿於季者年最少，而年少者特有言焉／夫騶爲季中之季，其年可謂少矣，而年少者如子張不可並著其言乎（季〔騶^{しんがり}〕を殿とする者は年最^{わか}も少し，而して年少の者（子張）は特に言う有り／夫れ〔季〕騶は季（末っ子）中の季（末っ子）と爲す，其の年^{わか}少しと謂う可し，而して〔孔子の弟子の中で〕年少なる者の子張の如きは並びに其の言を著わす可からざらんや）

〔破題下句：〕「年少」二字を用いて聯合す。宛然として天造地設（少しも無理がない）なり（『搭題文模了然』 卷一・十六葉・「無情割截題串破法」条）。

題目：堯舜與人 一妾（『孟子』 離婁下）

二帝爲人倫之至，齊人亦有夫婦之倫焉／夫堯舜且不異人，齊王何疑於孟子乎^①，彼有妻妾之齊人，其有也亦無足異耳（二帝 人倫の至りと爲す，齊人も亦た夫婦の倫有り／夫れ堯舜且に人に異ならず，齊王 何ぞ〔人に異なること有ると〕孟子を疑わんや，彼の妻妾有るの齊人，

其の「異なっていること」有るや、[しかし、その異なりは] 亦た異なるに足る無きのみ) (『搭題文模了然』 卷一・十六葉・「無情割截題申破法」条)。

①齊王何疑於孟子乎：題目の「堯舜與人」の截去された上文に「儲子曰、王使人嘲夫子。果有以異於人乎。

孟子曰、何以異於人哉。堯舜與人同耳 (儲子 曰く、王 人をして夫子を嘲^{うかが}わしむ。果して以て人に異なること有るや、と。孟子 曰く、何を以て人に異ならんや。堯舜も人と同じきのみ、と)」。

此二則 (用例) は題外の字面を拈して申合する者なり (『搭題文模了然』 卷一・十六葉・「無情割截題申破法」条)。

題目：無所取材 孟武伯 (『論語』 公冶長)

慨取材之難、魯大夫更不足取矣／夫以子路之賢、尙不能取材於夫子、若孟武伯者又何足取乎 (取り^{はか}材る (朱注による) の難きを慨^{なげ}く、魯の大夫 更に取るに足らず／夫れ子路の賢を以て、尙お夫子に取り^{はか}材る能わず、孟武伯の若き者は又た何ぞ取るに足らんや)

[破題:] 絶えて干涉する者無し。干涉する有るが若きを説き得れば、全く思は灵 (靈妙) なるを致し、筆は活なるを致すに在るのみ (『搭題文模了然』 卷一・十六葉・「無情割截題申破法」条)。

題目：而安。子曰泰伯 (『論語』 述而／泰伯)

子温而厲、威而不猛、恭而安：『論語』 述而

子曰、泰伯其可謂至德也已矣、三以天下讓、民無得而稱焉：『論語』 泰伯)

聖本安行古人所爲、行其所安也／夫夫子之安從恭出、則夫子之安行也、周初有泰伯非行乎、心之所安者哉 (聖 本より安んじて古人の爲す所を行なうは、其 (泰伯) の安んずる所を行なえばなり／夫れ夫子の「安んず」は「恭する」より出づ、則ち夫子の安じて行なうや、周初に泰伯有りて行なうに非ずや、心の安んずる所の者なるかな)

此二則 (用例) は本題の字面を拈して申合する者なり。親切にして有致 (趣きがある) を覺得す (『搭題文模了然』 卷一・十六葉・「無情割截題申破法」条)。

題目：惟民所止 黃鳥 (『大學』 傳第三章第一節・第二節)

得止象於元鳥、可進徵黃鳥之詩矣／夫惟民所止、讀元鳥者、可以識止象矣、彼黃鳥之民、母乃不得所止乎 (止まるの象を元鳥 (『詩』 商頌・元鳥篇：「惟民所止」の詩句の題名) に得れば、黃鳥の詩に進み徴す可し／夫れ「惟れ民の止まる所」、元鳥 (『詩』 商頌・元鳥篇) を讀む者は、以て止まるの象を識る可し、彼の黃鳥の民も、乃ち止まる所を得る母きか)

[破題上句:] 下截を拈せず。妙は能く耀映す。

此れ下截に襯して字面を借り申合するの法なり (『搭題文模了然』 卷一・十六葉～十七葉・「無情割截題申破法」条)。

(つづく)